県政だより 福井県

新春対談

子どもたちに伝統産業をつなぐ

越前漆器や若狭塗など、福井には古くから伝わる伝統産業がたくさんあります。

平成27年の新春を迎え、西川知事と㈱和（あ）えるの矢島里佳（りか）さんが、子どもたちに伝統産業の魅力を伝えることの大切さについて語りました。

矢島（やじま） 里佳（りか）さん
（昭和63年東京都生まれ）
株式会社和（あ）える代表取締役
「21世紀の子どもたちに、日本の伝統をつなげたい」との想いから、平成23年に「株式会社和える」を設立。幼少期から職人の手仕事に触れられる環境をつくるため、『0から6歳の伝統ブランドaeru』を立ち上げる。

子どもに伝統産業を

―全国の職人と赤ちゃん・子ども向けの伝統産業品をつくられていますが、福井の伝統産業を知るきっかけは何でしたか。

矢島 東京にある福井のアンテナショップ「南青山291」で出会った和紙問屋の方に、越前和紙の神様のお祭りに誘われ、参加しました。これをきっかけに福井の伝統産業を知り、越前漆器にもほれ込みました。

知事 越前漆器は、削り、塗りなど、複数の専門分野の職人が一緒になって作っています。そのため、デザインが素晴らしく、質も頑丈で、使いやすいのが特長です。最近は、お祭りの山車など大きなものにも使われ始めています。

―日本中の伝統産業の産地を回り、どのように感じましたか。

矢島 日本で生まれ育ったにもかかわらず、日本の伝統を全然知らずにいたこと、そして、日本には宝物がいっぱいあることに気がつきました。その宝物を子どもたちに伝え、つないでいきたいと思い、「和える」という会社をつくりました。

―そうして生まれた赤ちゃん・子どものための伝統産業品の一つが、「こぼしにくい器」ですね。

矢島 中に返しがあって、食べ物をすくうときに、うまくスプーンに乗せることができます。陶器だけでなく磁器と漆器、違う素材の器もあります。普段の食事を通して、子どもたちに各地の伝統を伝えていきたいです。

知事 伝統産業は、しっかり引き継いで、伝統の味わいを残すと同時に、使いやすいということが大事です。両方成り立たないと、うまく売り込めません。これからどんどん工夫して、日常生活で触れやすい伝統工芸品が作られると良いと思います。

子ども向けの越前漆器が誕生

―子ども向けの越前漆器が、いよいよ今月販売されますね。

矢島 3歳からの子どもを対象とした汁椀です。あえてフタを付け、汁椀の扱い方や所作を自然と身に付けられるようにしています。フタを開けた時には香りが引き立ちますし、今日はどんな中身だろうと、ワクワクします。越前漆器の職人である畠中昭一（はたけなかしょういち）さんと協力して、つくりました。

知事 子どもたちにとっては、自分のために作ってくれた器という感じがしますね。すばらしいです。

矢島 畠中さんの塗りに一目惚れし、一緒に汁椀をつくりたいと思いました。子どもが持ちやすく、所作を学べる汁椀をつくるというゴールに向かい、職人、デザイナー、私たち「和える」と、色々な大人がリレーし、ここまで辿り着くことができました。

子ども向け越前漆器の汁椀

「本物」に触れる

―伝統工芸品を使うことには、教育的な要素も含まれていますね。

知事 子どもは、大人が思う以上に色々なセンスを持っています。ですから、本物に触れ、感性を磨く機会を与えることが重要です。県では、小学1年生全員に伝統工芸品の塗箸を配り、学校給食で使ってもらっています。福井の良いものを全国に広めてほしいというメッセージを越前和紙に書き、一緒に渡しました。

―特に、鯖江市河和田小学校の子どもたちは、日ごろから本物の漆器や塗箸を使っているんですね。

知事 河和田地区での和膳を使う活動は、全国でも先進的な事例だと思います。和食が世界無形文化遺産に登録されましたが、小浜市の食育、大野市の食守とあわせ、登録のため政府が提案した活動に、福井県の活動が3つも入って、大きな自慢です。

漆器や塗箸を使った給食（鯖江市河和田小学校）

矢島 幼少期から本物に触れることにより、身の回りのものに愛着や興味を持ち、「大切にする心」が育まれるのだと思います。赤ちゃんや子どもに伝統産業品を届け始めて、「三つ子の魂百まで」という言葉が、正にそのとおりだと実感しました。

―越前漆器のほかにも、福井にはすばらしい伝統産業がありますよね。

知事 越前和紙、越前漆器、越前打刃物、越前箪笥、越前焼、若狭塗、若狭めのう細工と、7つが国の伝統的工芸品に指定されています。これらがコンパクトな地域に全てあるのは、全国的にも非常に珍しいんです。

―伝統工芸品は特別な時に使うというイメージがありますが、日ごろから接することが大事なんでしょうね。

矢島 越前漆器の汁椀も、使うことにより、つや感や色合いが少しずつ変わります。伝統産業品は、使えば使うほど、よりよい顔を見せてくれるので、毎日使ってくださると嬉しいです。

矢島（やじま） 里佳（りか）さん

福井県知事 **西川（にしかわ） 一誠（いっせい）**

担い手を育てる

―職人を目指す子どもが増えるといいですよね。

知事 伝統産業は、担い手として引き継ぐ人が必要です。そこで、丹南地域の5つの伝統産業の産地と、県、市町が一緒になって「越前ものづくりの里プロジェクト」をスタートしました。伝統工芸職人塾を開講し、後継者を育成しています。県内外の方がデザインや技術、経営を学んでいます。アクセサリーなど新しい分野にも広げていこうと思っています。

越前焼を学ぶ伝統工芸職人塾の塾生

矢島 ものを作るだけでなく、デザインや経営を意識することも大切だと思います。デザインや経営の感覚を持っている方と、いない方では、ものをつくるときに違いが出てくると思います。福井の伝統産業がこれからますます楽しみになりますね。

魅力を伝える

―福井の伝統産業をどのように発信していくかが、これから大事になってきますね。

知事 多くの人に産地に来ていただき、買っていただき、広めてもらうことが大事です。昨年7月、若狭さとうみハイウェイが開通し、嶺南・嶺北が一体となり、関西や中国・四国の人も福井に来てくれます。3月には北陸新幹線が金沢まで開業し、中部縦貫道も永平寺までつながります。交通が便利になり、観光の条件が非常によくなると思います。3年後には福井しあわせ元気国体と、障害者スポーツ大会があります。福井の伝統産業を知ってもらう絶好の機会になります。

―具体的な発信の方法はありますか。

知事 伝統工芸は室内で作業することが多く、意外と見る機会が少ないんです。そこで、外から見たり、中に入って体験できるような「工房の見える化」を進めていきたいと思います。また、観光ルートに伝統工芸の産地を入れ込むと、皆さんが楽しめると思います。それから、旅館やホテルで料理を出すとき、積極的に伝統工芸品を使っていただこうと思います。

矢島 私は6年近く毎年鯖江に通っています。地元の人が教えてくれたおかげで、鯖江の産業の魅力を知り、福井に興味をもつことができました。職人の仕事の部分と、皆さんに知って、見て、手間暇を理解していただく観光の部分とのバランスをとることが大切だと思います。

知事 今年は食をテーマとするミラノ国際博覧会が開かれます。和食と伝統工芸品の食器を、あわせてPRする絶好の機会です。また、福井国体の2年後には、東京オリンピックがあります。そこで伝統工芸品を使ってもらい、世界の選手たちにアピールするなど、海外へのPRにも力を注ぎたいと思います。

矢島さんと協力して、福井の伝統産業をどんどん売り込んでいきたいです。

矢島 盛り上げていけたら嬉しいですね。今、眼鏡ブランドをプロデュースする仕事をしており、こちらも福井との関わりの一つになっています。

また、生まれてきた子どもたちに、両親の出身県のものなど、日本のもの、郷土のものを贈るという文化をつくりたいと思っています。今年も全国を元気に回っていきたいです。

知事 福井県の中だけで考えるのではなく、県外の人の知恵や声をいただき、大きく輪を広げていくことが、これからの伝統産業の大きな戦略だと思います。